「こおりやまの米」通信

令和４年４月

編集：郡山市
JA福島さくら郡山地区本部（TEL. 921-0533）
NOSAI福島中央支所（TEL. 933-3307）
県中農林事務所農業振興普及部（TEL. 935-1310）

発行:郡山市農作物生産対策協議会（郡山市園芸畜産振興課 TEL.924-3761）

郡山市
イメージキャラクター
「がくとくん」

②飢餓をゼロに

Vol. 2　育苗管理～本田準備・田植え

＊過去の記事は郡山市ホームページから見ることが出来ます。

こおりやまの米通信　検索

1　育苗管理　～健苗育成に努めましょう～

【温度管理】

育苗時の温度管理は表1のとおりです。ハウス内に温度計を設置し、こまめなハウスの開閉により温度管理に努めましょう。ハウスを開放しても高温になる場合は、寒冷紗等で日差しを調整しましょう。

できるだけ外気と日光に当てるようにしますが、高温、過湿、強風や夜間の低温には十分注意しましょう。

表1　生育ステージと目標温度の目安

生育ステージ	日中(℃)	夜間(℃)
第1葉展開まで	25	10～15
第1葉展開後から硬化期	20	10～15

【かん水】

原則は1日1回、朝にたっぷりとかん水します。乾いた場合の追加かん水は昼頃にし、夕方のかん水は根張りが悪くなるので行わないようにしましょう。

2　プール育苗　～成功させるポイント～

プール育苗の苗は、水の保温効果により徒長しやすくなります。以下の点に注意して取り組んでください。

○緑化後はハウスサイドは夜間開放を基本とし、苗が伸びすぎないようにしましょう。

○入水開始は第2葉が伸びる時期とし、培土よりも下の高さまで入水します（培土や苗が水で覆われないよう注意）。その後、プールの底が出る前または出たらすぐに入水し、水位は苗の生育に応じて、最終的に培土が覆われる程度とします。培土中の水分が減少すると、苗立枯病等が発生しやすくなるので注意してください。

～県や市からの水稲種子購入助成について～

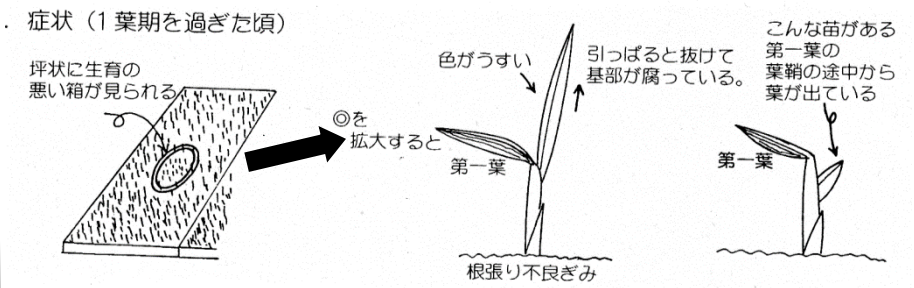
JAやほとんどの商系業者から購入した場合、申請手続きは不要です。詳しくは、種子購入店や県中農林事務所、郡山市園芸畜産振興課まで問い合わせください。

3　育苗中の病気　～マメな温度管理が予防のポイント～

【もみ枯細菌病】

○症状は、1.5～2葉期に急に現れます。坪状に枯れ、第2葉を引っ張ると簡単に抜けます。新葉の付け根が白くなることも多くみられます。

○対策は、温度管理（28℃以下）です。発病後に対処できる農薬はありません。罹病した苗箱は健全な育苗箱への感染防止のため、直ちに廃棄してください。



【苗立枯病】

○苗立枯病が発生したら、下記（表2）の薬剤を使用し防除を行ってください。

○発生が著しい苗箱は移植時の障害となるため、使用を控え処分してください。

表2　播種後に使用できる農薬

病原菌		症　状	ナエファインフロアブル*1	ダコニール1000*2	ダコレート水和剤*2	タチガレエースM液剤*3
苗立枯病	リゾープス	白いカビ		○	○	
	フザリウム	白～ピンクのカビ			○	○
	ピシウム	カビは見えない ドーナツ状に枯れる	○			○
	トリコデルマ	白～青緑のカビ			○	

※1：播種時～緑化期　※2：播種時～緑化期（但し、播種14日後まで）
※3：播種時又は発芽後

トラクター・田植機での農作業の後、水田から公道に出る際には、機械についた泥などを落としてから走行するよう、お願いします。

道路に落ちた大きな泥のかたまりは、通行の妨げになり、滑りやすく交通事故の原因にもなり、大変危険です。

4 本田準備 ～今年の出来はここで決まる！～

○不順天候に負けない稲体を作るため、耕深は15cm以上を確保しましょう。

○土づくり資材を積極的に使用して、倒伏しにくく食味の良い米づくりに取り組みましょう。

○被覆肥料のプラスチック皮膜殻や稲わら等の河川や湖沼への流入防止のため、「浅水代かき」を行いましょう。

5 田植え ～健苗を風のない暖かい日に移植しましょう～

低温時や強風時の移植は植え傷みが生じるので、移植は風のない天気の良い日に行いましょう。

○植え付け本数

・植え付け本数は株間にもよりますが1株当り4本程度にします。

○植え付け深さ

・苗が転ばない程度に浅く植えましょう。深植すると下位分げつが発生しにくく生育が遅れます。

○病害の防除

・病害の防除が必要な場合、農薬の使用回数のほか、成分毎の使用回数にも注意して防除しましょう。

○捕植

・補植は、欠株が連続している所だけ行いましょう。

・補植は、除草剤の散布前に済ませましょう。

・いもち病の発生源になるので、補植が終わったら、すみやかに置き苗を処分しましょう

6 本田初期の水管理 ～初期生育の確保のために～

田植え後、活着までの3～5日は苗が水没しない程度の深水管理にしましょう。

○活着後は浅水管理にしましょう。

水深は3cm程度とし、分げつを促進しましょう

7 病害虫対策 ～前年作の反省をふまえて～

○斑点米カメムシ類

本田で粉剤等の散布剤を散布できない場合、カメムシ類に登録のある育苗箱施用剤（デジタルメガフレア箱粒剤、ゴウケツバスター箱粒剤等）もあります。

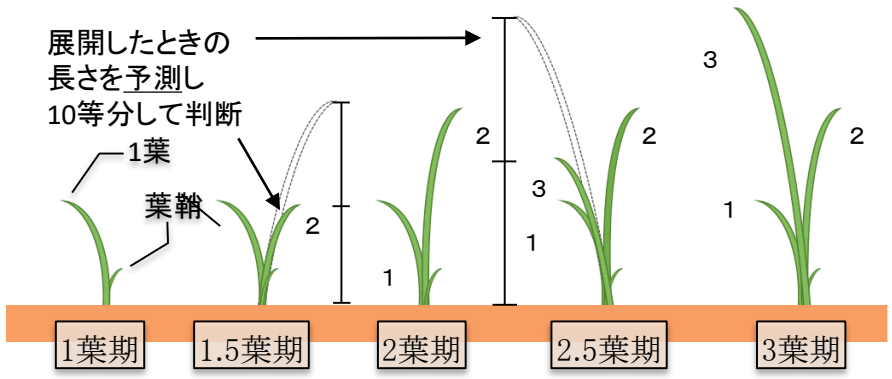
○紋枯病

前年に紋枯病が発生したほ場ではより発生しやすくなります。また、過繁茂で多発するため、窒素肥料の多用を避けましょう。紋枯病に登録のある育苗箱施用剤（ルーチンブライト箱粒剤等）もあります。

8 雑草防除 ～除草剤散布は早めに～

雑草の種類と葉齢にあわせて、除草剤を選択しましょう。ほ場内で、最も生育が早い雑草の葉齢を基準に散布してください。

〔ヒエ葉齢の数え方〕



○葉齢の数え方が不安な場合の対応

ヒエの出葉は気温の影響を大きく受け、高温が続く場合3日程度で1枚出葉します。この場合の除草剤散布の目安は以下のとおりです。

・一発剤（ヒエ3葉まで）を1回散布
　代かき12日後までに散布

・初期剤（ヒエ1葉まで）と一発剤（ヒエ3葉まで）を散布
　代かきから田植えまで7日未満の場合
　　初期剤：田植え後の当日に散布
　　一発剤：初期剤散布16日後までに散布
　代かきの7日後に田植えをする場合
　　初期剤：代かき後の当日に散布
　　一発剤：初期剤散布16日後までに散布
　代かきから田植えまでの期間が8日以上の場合
　＊ヒエ1．5葉までの登録のある初期剤の選択か、
　　一発剤を初期剤散布16日後までを早めて散布。
　＊除草剤は農薬登録の範囲内で使用してください。

○除草剤使用のポイント

・代かきの均平を心がけてください。

・散布時は7日間分の水深を確保してください。

・水口・水尻は、しっかり止水しましょう。

・7日間の水を維持できないほ場では、途中で処理層を破壊しないようにゆっくり入水してください。

・除草剤散布後7日間は落水しないでください。

幅1.7m以上の代かきハロー等の作業機をつけた公道走行では、大型特殊免許不要のトラクタでも、大型特殊免許が必要なので、注意してください。

また、灯火類など必要な装備もありますので、農機販売店にご相談ください。

春の農作業安全確認運動実施中！ ～郡山市は「セーフコミュニティ国際認証」を取得しています ～